上林曉全集 八

筑摩書房

上林曉全集　八

昭和四十一年十月二十日第一刷発行

著者　上林曉

發行者　竹之内静雄

發行所　筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京(四)七六五一(代表)

振替　東京四一二三

印刷　多田印刷株式會社

製本　矢島製本株式會社

© A. Kanbayashi

上林曉全集第八卷目次

お竹さんのこと……三
聖書とアドルム……二九
愉しき晝食……五一
梟の聲……七〇
結婚相談……八五
醉態三昧……一〇〇
鄙の長路……一三三
老梅……一四九
春淺き宵……一七三
片親……一八九
眞少女……二一一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

述懐……二三九
染井アパート……二四八
酒を運ぶ部屋……二六一
零落者の群……二七七
珍客名簿……二九九
尋ネ人……三三〇
青春自畫像……三五〇
五十歳……三六七
鉛筆の家……三八五
子女教育……四一一
雪解……四二六

薄紅梅……四四七
書誌……四五九

小說 八

お竹さんのこと

私はお竹さんが忘れられない。思ひ切ることが出來ない。諦めることが出來ない。

私はお竹さんに振られたのである。

或る晩、私はお竹さんの店、「若竹」で飲んで、一時過ぎ頃、例によつて、お竹さんに送られて、歸路に就いた。私は泥醉して、お竹さんの肩に摑まりながら、漸く歩いてゐた。お竹さんもかなり醉つてゐた。その時突然、お竹さんが私を詰るやうに言つた。

「武智さんは、『田面(たのも)』のマダムにも、本を上げたでせう。」

本といふのは、私が最近出した創作集のことである。

「うん、やつた。」

「わたし、いつか一緒に『田面』へ行つた時、棚の上にその本が載つてるのを見て、嫌やでしたわ。」お竹さんの聲は尖つてゐた。

「さうか。マダムが本屋で見て來て、吳れ、吳れつてねだるから、仕方なしにやつたんだ。マダムのほかにも、月田君にも小藤田君にも上げたよ。」

「そんなのは、いいけど。」

「『田面』のマダムにやつたのは、それと同んなじこつたよ。」

「わたし、わたしにだけ下さつたのかと思つて、とても喜んでゐたの。そしたら、誰にも彼にも上げてるでせう、わたし、嫌やですわ。」

「それなら、今度から、あんただけ、ほかの人には誰にもやらないから。」

「當てにならないわ。武智さんは、八方美人だといふ評判だわ。」お竹さんは私を輕んずるやうに言つた。

私はこたへた。「さうか」と、一言言つたきり、俯向き込んでしまつた。

「奥さんのお惚氣ばかり言つてる月田さんの方が、よつぽど立派だわ。」

私は默つた。お竹さんの目に、友より劣ると見えたことが、口惜しくてならなかつた。

「『田面』のマダムは、武智さんのお嫁さんになつてもいいつて、言つてるさうだわ。」

「そんな、馬鹿なことがあるもんか。」と私は一笑に附した。實際私は、『田面』のマダムは問題にしてゐなかつた。お竹さん、一本槍であつた。

「わたしの知らない間に、『田面』へ度々行つてるでせう。」とお竹さんの言葉は險を帶びて來た。

「ううん。あんたのとこを出て、二三度フラフラと寄つただけなんだ。あんたのとこへ行つたおこぼれで行つたんだ。」

「誤魔化さないで、行きたければ、堂々と行けばいいわ。」とお竹さんは怒つて來た。

「そんなに怒るなら、今度から『田面』へは絶對に行かない。その契ひにげんまんしよう。」

「嫌やですわ。」お竹さんは、私の取らうとする手を振り拂つた。

私はアルコホルで痺れた頭の中で、お竹さんは妬いてるなと思つた。お竹さんを怒らせながら、妬かれる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ほど一途に思はれることが、心中嬉しくないことはなかつた。しかし、ちよくちよく「田面」へ寄つて、お竹さんを妬かせたのは不覺であつたと、悔いないわけにゆかなかつた。そして、本を「田面」のマダムにやつたのは、お竹さんに燒餅を燒かせるきつかけになつたのに過ぎないと思はれた。

そもそも私が、「田面」のマダムに初めて會つたのは、お竹さんの店でであつた。或る晩私が「若竹」で飲んでゐると、店のガラス戸をガラリと開けて、「御免下さい。武智さんといふ方はいらつしやらないでせうか」と訪ねて來た女があつた。見ると、昔の女優髷とでも言ひたいやうに、洒落た髪の曲げ方をした女だつた。「僕ですが」と私が答へると、「ああ、よかつた」と、嬉しさうな微笑を手で遮りながら、私の側に來て並んだ。少し醉つてるやうだつた。『田面』のマダムですわ」とお竹さんが言つた。私は酒を一杯奢つた。彼女は躊躇てから、武智といふ小説家が界隈を飲み歩いてゐるといふことを聞いてゐて、一度會ひたかつたのだと言つた。その夜は、何んとしても會ひたいと、先づ「ひさご」へ行つた。私が以前よく行つてゐた店である。そこで尋ねると、きつと「若竹」でせうといふことだつた。そして私を尋ね當てたのだつた。こんな出會ひも、今となつてみれば、お竹さんが氣に病んでゐたのではないかと思はれた。それからちよくちよく、私は「田面」へも顔を出すやうになつたのである。

こんなこともあつた。或る晩「若竹」で飲んでゐて、「田面」のマダムの噂になつた。私は醉つた勢ひで、「『田面』のマダムは、花で言へば、秋草の楚々たる趣があるねえ」と口を辷らせた。と、「わたしは何んの花でせう」と笑ひながら、お竹さんが私の顔を覗き込んだ。「あなたは勿論春の花ですよ」と私は言つたが、後になつてみると、冗談とは言へ、お竹さんの手前、「田面」のマダムを少し讃めすぎたなと思はぬわけにゆかなかつた。心なしか、お竹さんの顔は、負け惜しみで、少し歪んでゐたやうだつた。私はまた、「田面」のマダムをモデルにして、小さな短篇を書いた。それをお竹さんにも讀ませた。その中に、例へば、「『田

面』のマダムが黒の服を着けると、聖未亡人といつた面影がある」といふ風に書いてあつた。それかあらぬか、それから二三日した或る晩、お竹さんと二人で外に出て、「田面」の前を通りかかると、「寄つて行きたいでせう」と、お竹さんが一寸嫌味を言つた。「ううん」と私は顔をのけぞらせた。

こんなことが、お竹さんの前に廻つて、抱きすくめた。

私はお竹さんの肚の中に積り積つて、發火點を待つてゐたのだと思はれた。

「『田面』のマダムなんて、何んでもないんだよ。好きなのは、お竹さんだけなんだから。」と、私はお竹さんの肩を揺すぶつた。

お竹さんは、冷然と立つたままだつた。

「ねえ、後に手を廻してよ。」と言つて、私はお竹さんの手を取つて、自分の背に廻させようとした。

「嫌やですわ。」と、お竹さんはその手を振りもぎつた。

そのまま、私は胸を掻きむしりたいやうな氣持で歩いてゐるうちに、いつも別れる四つ角に來てゐた。

「わたし、もう歸りますわ。」

お竹さんは素氣なく言ひ放つと、私をそこに置いたまま、スタスタと後に引き返して行つた。私は呆然として、お竹さんの黒い影が、素足の白い影を引きながら、小走りに急いで行くのを見送つてゐたが、何んとしても胸が納まらなかつた。人ひとり通らない深夜の街に、「お竹さアん」と一聲あげると、私はお竹さんの後を追つかけた。私が追つかけて行くのを知ると、お竹さんはつと右手の路地に切れ込んだ。私も路地に走り込んだ。そこにある人家を二三軒出外れると、雜草の生ひ茂つた濕地になつてゐて、路が小さく通じてゐた。そこまで來てみたが、お竹さんの姿は見えない。どうしたのかとウロウロしてゐると、人家の裏蔭から、お竹さんの姿が現れた。

「武智さん、もうお歸りなさい。」お竹さんは私に近づいて來て言つた。

「胸が切なくて、歸る氣がしないんだよ。」と、私はまたお竹さんを抱きすくめた。お竹さんは、されるがままになつてゐるきりだつた。

「僕、本當にお竹さんが好きなんだよ。いつかの將棋の駒、いつ呉れるの。」と、私はお竹さんに甘えかかつた。

將棋の駒といふのは戰爭中、お竹さんが、山形縣の天童溫泉へ行つた時、知人から土產に貰つたものだといふことだつた。それが、神奈川縣の厚木在の實家に置いてあるといふのである。お竹さんは、私の贈つた本によつて、私が將棋好きであり、山形の黃楊の駒がいいといふことを初めて知つて、本を貰つたお禮返しに、その將棋の駒を私に呉れるといふ約束だつた。

「今度田舍へ歸つた時、取つて來ますわ。將棋の駒なんて、何んの役にも立たないものを貰つてと、ほつちらかしてあつたのに、武智さんとお知合ひになつたお蔭で、役に立つ時が來ましたわねえ。何が役に立つか判らないものねえ。」

その約束をした時、お竹さんはさう言つた。私は嬉しかつた。私の持つてる駒は、彫つた字が黑いのであるが、お竹さんの持つてる駒は、赤い字だといふことだつた。いやが上に、それも私を喜ばせた。そして、きれいな桐の箱に入つてゐるといふことだつた。「その箱の蓋の裏に、武智一夫樣、深澤竹子、と書いて下さいよ」と私は言つたが、「わたしは字が下手だから」と、お竹さんはためらつた。私はそれ以來、いつ呉れるか、いつ呉れるかと、待ち侘びてゐたのだつた。そのことを、私は言つたのだつた。

「將棋の駒なんて、もうなくなつたわ。」と、お竹さんは邪慳に言つた。

「どうして。」

「川に流したわ。」

「嘘、嘘。」

「本當だわ。川の上を流れて行くの、とても氣持よかつたわ。」

お竹さんは、私を焦らすかいぢめるために、出鱈目を言つたのにちがひなかつた。しかし、その時私の頭の中では、將棋の駒が流れてゆくさまが、目に見えるやうだつた。赤い字を彫つた白い駒が、算を亂して、川の上を浮きつ沈みつ流れて行くのだつた。お竹さんが、氣持好かつたと言ふ如く、それは、目を瞠らせる光景に思はれた。私はそれを信じてしまつた。

「どうして流したの。」

私はお竹さんの胸を叩いて、駄々を捏ねた。その時の私の氣持は、子供の時、籠に飼つてゐた目白を逃がした時の氣持を思ひ出させた。地團駄踏んでも、庭の上を轉げ廻つても、飛んで行つた目白を、もとの籠に戻らせるすべはなかつた。あのすべ無さであつた。

「もう要らなくなつたから。」とお竹さんは冷かに言つた。

「要らなくなるはずはないぢやないの。」と私は責めた。

「それほど欲しければ、新しいのを買つて上げますわ。」

「駄目だ、駄目だ。もとのでなくちや、駄目だ。ねえ、呉れよ、呉れよ。」

「ほんとにないわ。うちには箱ばかり。」

「どうして流したの。」

私は取着く島がなくて、へたへたと、地にへたばるやうに、蹲み込んでしまつた。私は頭を抱へて、空ら泣きに泣いた。どうしたわけか、いつも悲しみが極まる時は、私は涙が出なくて、空ら泣きに泣く習はしで

ある。

その間に、お竹さんは身を翻して、素早く逃げ去つた。最早追ひ縋る氣力もなくなつた私は、追ひ縋つても仕方がないと諦めて、暫く頭を抱へて蹲んだままだつた。やがて立ち上ると、私はあたりを見廻した。お竹さんは、影も形も見えなかつた。唯一筋、お竹さんの逃げた方に、丈高い雜草の間に挾まれて、細々とした路が、ぼうつと霞んでゐるきりだつた。

「お竹さアん、お竹さアん」と、私は呼ばはつた。しかしそれは、寂靜まつた人家と、それに取圍まれてひろがつた草つ原の上に、空しく谺しただけだつた。私は諦めて、獨りしをしをと歸つて來た。

私はお竹さんから、最後の宣告を受けたのだつた。それきり、私とお竹さんとの、一年に近い深いえにしは、ブツリと絕たれてしまつた。あれからもう一月餘りになる。私はお竹さんの心變りが信じられなくて、未練がましくその翌る晚も、その翌る晚も、三晚四晚引きつづき、今晚こそはお竹さんが思ひ返してゐるのではないかと期待しながら、「若竹」の閾を跨いだものだつた。しかし、いつ行つても、お竹さんは私の顏を見ると、困つた男がやつて來たとでも言はんばかりに、顏を顰め、額に皺を寄せて、笑顏一つ見せず、話一つ仕かけるではなかつた。私が機嫌を取るやうに話しかけても、お座なりに返事をするきりだつた。酒を注ぐのもお座なり、通しを出すのもお座なりだつた。まつ白い齒を見せ、笑みかたまけて、いつも愛想好くしてくれたお竹さんは影をひそめて、そこにはもう赤の他人のお竹さんがゐるとしか思へなかつた。

「若竹」には、三疊くらゐの居間のほかに、店の方に、一疊そこそこの小さな部屋がある。私はいつもそこに通された。ほかのお客は腰掛の上で飮ませておいても、私だけはその部屋に通してくれた。「武智さんだけに取つてあるお部屋ですわ」と、お竹さんが言つたこともあつた。去年の暮れから今年の初めにかけ、私はその部屋で、火鉢に手をかざしながら、お竹さんのお酌で、數々の樂しい夜を送つたものだつた。今年も

もう秋闌けて、私はまたその小さな部屋に閉ぢ籠つて酒を飲みたいのであつたが、お竹さんは素知らぬ風で、私を通してくれないのであつた。ほかのお客がそこで飲み騒いでゐるのを、指を咬へて見てゐねばならなかつた。のみならず、私はその部屋で恐ろしいことを見た。

去年の暮れ近く、私が初めて「若竹」に飛び込んだ晩、開店間もなかつたお竹さんは、「入舟」のちらしを持つて來て、私に字を書いてくれといふのだつた。私は醉つた紛れに、「開運の願」と書き、自分の名を署した。お竹さんは非常に喜んで、「永久に家の寶にしますわ」と言つて、それをその部屋の板壁に貼りつけた。私も嬉しかつた。そのちらしは、あの呪ふべき夜まで、そこに貼りつけられたままだつた。それが、或る晩氣附くと、剝ぎ取られてしまつて、形を留めないのだつた。それほど明瞭に、お竹さんの心を見せつけられては、流石の私も總てを斷念せねばならなかつた。辛いが、斷念せねばならなかつた。私はガチャンと戸を閉めて「若竹」を出ると、二三軒やけ酒を飲み歩いて、泥醉した。歸る途々、私は頭を掻きむしり、胸を掻きむしり、泣き聲を立てながら、よろけ歩いた。朝起きてみると、どこで失つたのか、冠りつけのハンチングが見えなかつた。

それ以來、私は「若竹」には足踏みしないことにした。と同時に、私の梯子酒が始まつたのである。「若竹」に入り浸つてゐた一年近い間といふもの、最近になつてちよくちよく「田面」へ行つたほかは、私はどこの飲み屋にも殆ど足を向けなかつた。「若竹」だけであつた。それまでよく行つてゐた「ひさご」へも一切顔を出さず、そこのおかみから恨まれたほどだつた。それほどお竹さんが好きだし、またお竹さんに操を立てたい氣持でもあつた。ところで、「若竹」が禁斷の店となるとともに、私は行き場を失つてしまつた。今更「ひさご」へ戻るわけにもゆかず、飲み屋から飲み屋へ、一晩のうちには五軒も六軒も轉々するのだつた。しかし、どこへ行つても、落ちつかず、心の底から樂しむといふこともないのだつた。一寸好きだなア

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com